

グループワークにおける触媒的参加者の働き —意識的ではない主導的機能—

Work of Catalytic Participants in a Groupwork as Unintentional Leadership Function

西中 美和[†], 白肌 邦生[‡], 神田 陽治[‡]

Miwa Nishinaka, Kunio Shirahada, Youji Kohda

[†]総合研究大学院大学, [‡]北陸先端科学技術大学院大学

Sokendai (The Graduate University of Advanced Studies), Japan Advanced Institute of Science and Technology
nishinaka_miwa@soken.ac.jp

Abstract

This article presents the work and the definition of catalytic leadership which is one of the unintentional group functions with tacit influence in a group composed of members with equal relations, those of which are based on the analyses of an experimental workshop.

Keywords — Group functions, Catalytic leadership, Influence, Interaction

1. はじめに

本稿においては、自然発生した役割における、触媒的参加者の集団機能に焦点を当て、それが意識的ではない主導的機能として働き、他の集団機能や集団のアウトプットにどのような影響を与えているかを考察する。これらを明らかにすることで、学術的には、意識的ではない集団機能としての触媒的機能の定義を提示する。実務的には、グループワークに適用することで相互作用に働きかけ、高度な結果を生み出すことができる。これは、研究機関の研究グループ、教育機関のワークショップ授業などの協働学習グループ等、小規模であるが高度な結果を求められる集団に適用可能である。

2. 研究の背景

研究の社会的背景として、曖昧な役割分担で進む集団活動が多いことが挙げられる。実社会の集団活動では明示的役割アサインがない場合や、アサインされた役割とは異なった役割を実施する場合などが、かなりある。また、自分がその役割を実施していることを気づかずに行動している場合もある。気づきがないまま役割を実施しているが、実はその機能は重要な集団機能である場合もある。このような集団活動は平等性を重んじる現代に特徴的な活動である。

学術的な背景としては、上記のような現実の状況がありながら、曖昧な役割分担で発生した集団機能

の先行研究は多くはなく、無意識な役割から発生する集団機能がどのような働きをしているか、集団のアウトプットにどのような影響を与えているかは、いまだ明確ではない。構成員の対等性を含めた関係性に着目した研究としては、Harary[1]の集団構造の形態が挙げられる。本稿で対象とするグループの構造は、Hararyの集団構造の形態に準拠した形で構成する。リーダーシップは集団に影響力を及ぼす能力であり、機能である。特性論から始まり行動理論へと進み、機能としてのリーダーシップと定義されている。主導的機能という用語は、この点を取り上げたものである。不確実性の高い現代においては条件適合理論が提唱され、最近ではサーバント（支援型）リーダーシップの考え方も出されているなど集団機能としてのリーダーシップ機能が多くの研究者によって提唱されている[2]。支援型以外にも「支持」[2][3]「相互作用促進, 目標達成行動」[2][4]「配慮」[5][6]等、リーダーシップ機能には多数あるが、相手に作用することで相手を自分の意図するところに変えてゆくと想定される触媒的リーダーシップ機能に関しては学術的な先行研究はほとんどない。

3. 研究手法

研究手法は事例研究であり、試験的に行ったグループワーク授業を事例として採用する。グループワークの会話を定量・定性的に分析することで自然発生した集団機能の働きを考察する。グループワークは農村を行政区域とするA市の将来を考える政策立案的な戦略ロードマップ（工程表）を作成するというものであり、テーマは「やさしい街を作る」というものである。2016年から2017年にかけて、計6回の演習を行った。表1に示すように、メンバーとなる12名を、事前の研究スタイル等のアンケート結果から、Hararyの集団構造の形態に準拠した構造を形成するように

組み合わせ、6チーム作り、各チームがワークショップを1回ずつ行った。1回のワークショップ時間は3時間である。その中で特に触媒的参加者機能が自然に発生しうまく機能したチームAを成功事例として取り上げ、どのような場合に集団のアウトプットに正の影響を与えるかを明らかにする。チームAはリーダータイプが2人いるTwo-Top体制の構成である。これはHararyの集団構造の形態では、民主的形態に準拠する。メンバーはS1, S2, S7の3人で、S1は典型的リーダー、S2は内省型のリーダータイプである。自然発生する役割による集団機能を作るために事前の役割アサインは行っていない。チームAはグループワークの結果、まとまりのある戦略ロードマップを完成させた。「リラックス」という機能を提供することで「やさしい街づくり」という価値を生み出す」というビジョンを掲げ、そのビジョンに基づいたロードマップを完成させた。中心となるコンセプトは「リラックス」である。

表1 チームAの構成と集団構造形態

メンバー(Student ID)	S1, S2, S7
準拠した集団構造の形態	完全民主的
チーム構造 (○はメンバーを表す)	

4. 分析手法および結果

分析手法としては、下記のように定量、定性分析を併用するトライアングレーションを採用する[7]。これにより「話題の中心を提供する機能」、「コンセプトを提供する機能」、「アウトプットへの反映」でリーダーシップを把握し、また、相互作用を分析する。

- (1) グループワーク発言の共起ネットワーク分析
 - ディスカッションの内容・発言とメンバーの対応の把握
- (2) グループワーク発言の特徴語分析
 - 中心となる話題は何かを明確化 ((1)と合わせ話題の中心を出しているメンバーを把握)
- (3) グループワークのアウトプットであるロードマップにおけるテキストの共起ネットワーク分析
 - ディスカッションの内容のアウトプットへの影響の把握 ((1)と合わせ結果に対するメンバーの影響力を把握)
- (4) グループワークの会話の定性分析
 - メンバー間の相互作用と影響の把握

まず、(1)を行うために、3時間のグループワークの発言をスクリプトに書き起こした。発言とその関係性を明示するため KhCoder を用いた共起ネットワーク分析にかけた (図 1)。各メンバーがどのような発言をしているかを明示するために外部変数として Student ID を与えた。共起ネットワークとは、形態素解析後、テキストの中の単語をノードとし、単語と単語の共起性をリンクで示すネットワークであり、リンクの強さを Jaccard 係数で表す。Jaccard 係数は、類似度を表し、リンクが強いほど値が大きくなる。図においては、関係性が強い場合は、ラインは太くなり、単語の頻度が高ければ円は大きくなる。図の下枠に表示されている N:x E:x D:x は、各々図内に表示されている N:Node (単語) 数, E: Edge (連携) 数, D: Density (密度: すべての単語のうち何%が図に表示されているか) を表している。図 1 では、0.44(44%) の単語が表示されていることを示している。図 1 の結果からは、チーム A は「サービス」を中心とし、まとまった話し合いをしているように見受けられる。またすべてのメンバーが話し合いに参加している。

次に、(2)として、特徴語分析を用い Jaccard 係数を明示して、どのメンバーがどういった発言をしているかをさらに確認する (表 2)。表 2 の結果からは「サービス」という単語自体は S2 が最も発言しているようであるが、S7 も発言しており、S1 も単語そのものではないが、「機能」「提供」「マッチング」などサービス関連の単語を発言している。チーム A のコンセプトである「リラックス」に関しては S2 が中心となって発言していると思われる。これらの結果を見ると S2 がコンセプト作成に関してはリーダーシップを発揮しているように思われるが、相互作用まではあまり明確ではない。

さらに、(3)として、完成したアウトプットである戦略ロードマップにおけるテキストを分析し、(1)(2)と合わせ、アウトプットにおける各メンバーの影響度を見てゆく。図 2 は、チーム A の完成ロードマップ上に要素として記載されたテキストに対して共起ネットワーク分析を行った結果である。メンバーの誰がテキストを記載したかが明確ではないので、外部変数としての Student ID は与えず、媒介中心性で見ている。媒介中心性とは、ノードの連携による集合体間を媒介する程度のことであり、ある点が他の 2 点間を結ぶ最短経路上にある度合いである[8]。

No	メンバー	発言	集団機能	コード	考察
1	S2	もう1つは何ですか？	Management		促進
2	S1	もう1つはプラットフォームサービス(インターネット・サービス)で農家や高齢者と若者をマッチングするようなサービスを考えました。同じ地域の中でやりとりをする人間関係が良好になるといいな、と思います。	Change Leadership	サービス 人間関係	人間関係という新しい観点を出す (S1は「人間関係」を考えたい)
3	S2	この町に固有ですか？	Knowledge Enrichment		質問で探みを加える
4	S2	A市は観光スポットと近い。飛行場があるK市にも近いので、他の地域にも行きやすい、来やすい。交通網の中心になる。A市で産業を起すよりは、リラックスできる街としての存在になるべきかと思う。富裕層は自然環境を求めるので、リラックスできる街としての「やさしい」街を考えている。	Change Leadership	「やさしい」はリラックス	S2は「やさしい」という概念を考えたい
5	S1	近場に有名な観光地があるのに、A市で観光消費するかな？	Knowledge Enrichment		反対意見(正論)でS2を考えさせる
6	S2	(S2少しむっとする)	Conflict		葛藤
7	S2	A市に住むことを考えているんです。有名な観光地は好きな人はいけど、リラックスしたい人には静かな方がいい。	Knowledge Enrichment	リラックス	反論することで深み
8	S1	なんか、3人のアイデアが混ざってできないのかな	Management		統合(S1は3人の意見をすべて取り入れたい)
9	S2	まずは「やさしい」についての理解が必要だと思います。2人は具体的なサービスを考えていますが、自分は「やさしい」の意味について考えてみたいと思います。	Concept Leadership	「やさしい」の意味を考えたい、サービス	S2はまとめるのではなくコンセプトを深く考えたい
10	S1	「やさしい」街は、住みやすい、リラックスできる街ですか？	Knowledge Enrichment	「やさしい」は、「住みやすい」「リラックス」	S1がS2に歩み寄り、S2の考えを深化
11	S2	そうですね。	Following		支持
12	S1	私の考えでは「人にやさしい」です。人間関係につながっています。	Catalytic Leadership	「やさしい」は「人」にやさしい、人間関係	自分の意見(人間関係)でS2の考えを深める(S1はS2に歩み寄るが自分の意見も入れる。S7の支持を得る)
13	S7	(うなづく)そうですね。	Following		支持
14	S2	すごく感性的で柔軟なもので・・・	Knowledge Enrichment		コンセプトの拡充
15	S2	人の「やさしい」について、今の現状とか、つながりについて調べますか？	Knowledge Enrichment	「人」に「やさしい」	S2もS1に歩み寄り、S1の意見の拡充 S1はS2の意見をたてながら自分の意見をS2に反映させている

表3 グループワークの会話の定性分析(抜粋)

5. 考察および結論

分析の結果、触媒的機能が相手から良い考えを引き出すよう影響し(表3, No.10)、それが相手の考えと近似している場合(表3, No.11)に作用が進んでいる。触媒的機能は、相手の考えに作用する形で深化を進める機能である。深化が進む形としては、(1)触媒的参加者が相手に作用することで、相手も納得のできる考えが相手から出た場合(表3, No.11)、(2)触媒的参加者が自身の考えを意識的ではない形で他の参加者に移入し、相手に進めさせる場合(表3, No.12,15)の2段階があった。相手に作用し行動させるという形ではあるが、前者は「支持」「推進」であり、支援型リーダーシップに近い。後者は、暗黙的な影響力の行使である。主導的機能の働きは影響力の行使であることから、この働きをする触媒的機能は主導的機能に包含されるということが出来る。前者は元々の相手の考えを深化させることに対して、後者は相手に自分の考えを、あたかも相手が考え出したかのように移入し、集団の目的として自分の目的を達成している。相手の変化の大きさとしては後者が大きく、この行為が意識的ではない主導的機能としての触媒的機能(Catalytic Leadership)であると提唱する。

ただし、チームとしては、触媒的リーダーシップのみならず、通常の管理的なリーダーシップ、コンセプト・リーダーシップ、相手の考えの指示や深化といった複数の機能が相互に作用した場合に高品質なアウトプツ

トを生み出していると思われる。

6. おわりに

本稿では、実験的ワークショップ授業を事例にとり、定量および定性調査と分析を行った。その結果から、自然発生した触媒的参加者の集団機能に焦点を当て、それが意識的ではない主導的機能として働き、集団のアウトプットに自分の意思を反映させるという影響力を考察した。また、暗黙的な影響力の行使を行う触媒的機能は主導的機能であると定義した。本稿の結果は特定の事例におけるデータおよび手法の制約がある。今後分析を進め、さらに他の事例での調査を含め一層の汎用化を検討する。

謝辞

本研究は [JSPS 科研費課題番号 JP16K03859](#) の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] Harary, Frank (1959). "Status and Contrastatus. Sociometry," Vol. 22, pp.23-43.
- [2] Bowers, David, G. and Stanley E. Seashore (1966). "Predicting Organizational Effectiveness with a Four-Factor Theory of Leadership," *Administrative Science Quarterly*, Vol. 11, pp.238-263.

- [3] Likert, Rensis (1961). *New Patterns of Management*. New York: McGraw-Hill.
- [4] Hemphill, J.K., and Coons, A.E. (1957). "Development of the Leader Behavior Description Questionnaire," In R.M. Stogdill and A.E. Coons (eds.), *Leader Behavior: its description and measurement*. Columbus: Ohio State University, Bureau of Business Research.
- [5] Halpin, A.W. and Winer, B.J. (1957). "A factorial study of the leader behavior descriptions," In R.M. Stogdill and A.E. Coons (eds), *Leader behavior: Its description and measurement*. Columbus, OH: Bureau of Business Research, Ohio State University.
- [6] 三隅二不二(2005) 『リーダーシップ行動の科学』有斐閣.
- [7] Yin, R. K. (1996). *Case Study Research: Design and Methods* (2nd Ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- [8] Freeman, L. C. (1977). "A set of measures of centrality based on betweenness," *Sociometry*, Vol.40, pp.35-41.